本展開催にあたり、下記の方々並びに機関のご協力をいただきました。 ここに記して深く感謝の意を表します。

川崎市市民ミュージアム 深川雅文 クリストファー・カルテンパッハ

Acknowledgement

In holding this exhibition, we would like to express our sincerest thanks to the following individuals and institutions for their kind cooperation.

Kawasaki City Museum Masafumi Fukagawa Hanako Hayashi Christopher Kaltenbach



古晓一人 Histori Yadrinaki 静物 Still Life/t.1934/Gelazin alber print

午前10時から午後6時まで(木・金のみ午後8時まで) 入館は開館の30分前まで

■休館日

毎週月曜日(休館日が祝日または振替休日の場合はその翌日)

年末年始(12月28日から1月4日)

常設展(3階常設展示室·地下I階映像展示室) 一般·大学生=500[400]円小·中·高校生=250[200]円

- 一般·大学生=600[480]円 小·中·高校生=300[200]円
- 常設/企画共通観覧券
- 般・大学生=1,000[800]円 小・中・高校生=500[400]円 []内は20名以上の団体料金

編集:東京都写真美術館 執筆:神保京子, 金子隆一, 中原淳行 製作:美術出版デザインセンター デザイン;中垣デザイン事務所 翻訳:ザ・ワード・ワークス 発行:(財)東京都歷史文化財団,東京都写真美術館 ©1998 〒153-0062 東京都日黒区三田1-13-3 Tel:03-3280-0031

□小学生未満、65歳以上の方及び障害のある方とその介護の方1名は無料になります。 口次に該当する方は常設展(映像工夫館も含む)のみ無料となります。

都内の小・中学生、第2・第4土曜日に観覧する高校年(要証明) ■インターネットアドレス http://www.tokyo-photo-museum.or.jp ■JR恵比寿駅東口より徒歩約8分、営団地下鉄恵比寿駅より徒歩約10分 〒153-0062 東京都目照区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel:03-3280-0031 NTTハローダイヤル:03-3280-8600

表練問版:アーヴィング・ペン Ireing Penn 練覧 34、ニューヨーク Cigarettes 34, New York 1972 (printed in 1975)/Platinum pulladium print

Edited by Tokyo Metropolitan Museum of Photography Text by Kyoko Jimbo, Ryuichi Kaneko, Atsuyuki Nakahara Produced by Bijutsu Shuppan Design Center Co., Ltd. Design by Nakagaki Design Office Translated by The Word Works
Published by Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
Tokyo Metropolitan Museum of Photography €1998
1-13-3 Mita, Meguro-ku, Tokyo 153-0062, Japan Phone:03-3280-0031



Printed in Japan

CHAPTER

Still Life Arrangement as Constructed Landscape 静物の世界

1998年7月3日[金]-9月27日[日] July 3 fri.-September 27 sun. 1998



主催 東京都写真美術館 Tokyo Metropolitan Museum of Photography

はじめに

「視線の回廊」展第2部となる本展「静物の世界」では、「オブジ ェ」をキーワードに、静物のイメージの系譜を辿ろうとするものです。 写真における静物写真の歴史は、風景や肖像といった他のジャ ンル同様、写真誕生の頃から連綿とした軌跡をかたちづくってい ます。その規範として位置づけられる。西洋絵画の主要テーマ の一つとして描かれてきた「静物画」の歴史は、16世紀~17世紀 頃から次第に独立した絵画の一様式として確立されるようになっ たものです。古典的な絵画のモティーフとして描かれてきた対象 は、本や壺や楽器、芸術家たちのアトリエに置かれた椅子や画 材道具などであり。また果実や切り花、捕獲された動物など、身近 に存在し、慣れ親しんだものでした。

写真史における静物の表現にも、こうした西洋絵画の古典的 様式を踏襲した作品が散見されます。物質と物質との関係性か ら生み出される新たな表現空間は、画家たちと等しく。写真家た

ちにとってもまた身近であると 同時に、それぞれの作家の思 想を反映しやすい題材であっ たと言うことができます。物質 と物質が一か所に寄せ集め られ、構成され、ある一定の空 間でかたちづくられるイメージ は、台座の上に構成された。 理想化された「風景」の特殊 な一例であると捉えることもで きるでしょう。

シュルレアリストたちは、こう した静物の世界において、異 なる性格の物質(オブジェ)同 士を混在させたデベイズマン の手法を用いて, 現実を直視 すると同時に旧態依然とした 表現の歴史に新たな領域を 切り開こうと試みました。彼ら は偶然性や意外性をもった組 み合わせによるオブジェの成り 立ちに着限し, 異質な物質同 士を引き合わせることによって それぞれの物質に期待された 機能性を覆し、またそれらの

存在感を強調し、新たな美意識と鋭敏な洞察力のもとに、それぞ 為である。このネーミングは、「優美なる一幌骸は一新しい一酒を一 れの物質の存在に対する再認識を喚起させたのです。

近代的写真表現が成立する20世紀初頭においては、物質に 対する認識は極めて即物的なものでした。物質に向けられた視 線は、斬新なパースペクティヴを備えた新たな価値観のもとに、物 質そのものの形態やデザイン・構成に意識を促し、広告表現にも 新風を吹き込んでいます。このようにして、物質と物質の関わりの なかから生み出された作家たちの表現の舞台は、風景としての 空間構成力に裏付けられた時代の息吹をも反映させています。

「静物の世界」展では、こうした視点を軸に、オブジェにまつわ る多様な表現を展観いたします。また「視線の回廊」という総合 タイトルのもとに年間を通じて開催される本展覧会は、この後第3 部のテーマである「風景」、4部の「肖像」へと展開し、互いに連問 する要素や視点を織りまぜながら、ギャラリーの回廊を巡るように 美術館のコレクションを中心とした作品を構成し、観賞していた だこうとするものです。

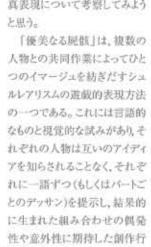
ロンリー・マケット―シュルレアリスムのオブジェ

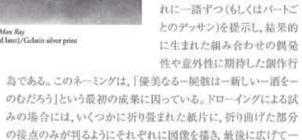
シュルレアリストたちが物体に対して示した興味、あるいは物質 の組み合わせや配置によって飼りだされた光景は、伝統的な「静 物画」の作法に削って試みられた所産とはある意味で対極をなし ている。16世紀から17世紀にかけてヨーロッパにおいて確立され た「静物画」のスタイルが、様々な寓意性を備えたオブジェの集積 によって秩序立った世界観を確立させようとしたのに対して、1930 年代を中心に展開されたシュルレアリスムのオブジェの表現は,物 質に期待された機能を根底から置し、物質そのものに対する新た な認識を喚起させることに主限を置いていたからである。

シュルレアリスムの活動において、オブジェの役割は極めて重 要な意味合いをもっている。活動そのものは、フロイトの心理学に 洗礼を受けながら、1924年、アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム

> 宣言」を契機に開始された。そ の後様々な経緯を辿りながら。 30年代後半に最大の盛り上が りをみせ、大戦の影響に阻まれ ながらも活動はブルトンを中心と して継続され、やがて次第に終 息していった。本稿では、数多 くのオブジェを制作し、これを写 真の記録として残したマン・レイ の活動を主軸として、シュルレア リスムにおけるオブジェとその写 真表現について考察してみよう

「優美なる屍骸」は、複数の





こうした手法は、シェルレアリスムが指向したデベイズマンの目 的に連なるもののように思える。例えばブルトンが「できるだけかけ 腫れた二つの対象を比べ合わせること、あるいはまったく別のやり かたで、それらを唐突かつ魅惑的な形で出会わせること」"と記し てもいるように、それらは意表をついた組み合わせや展開を、言語 を通じて追求することによって、驚きに満ちた激情や、オリジナリテ イに溢れた美の深遠、「痙攣的な美」へと薄くひとつの装置と成り

シェルレアリスムの主体となるオブジェは、いくつかの例を除い て、オブジェそのものが独立した鋳型(マケット)としてのデベイズ マンを内包している。また異なる機能や性質を備えた物体同士の



⇒ 1-4 Man Ray E000 Cadem/1921 (printed later)/Gelatin silver print

つのつながった表現とした。

Foreword

The second of our Corridor of the Gaze exhibitions is entitled "The Lonely Maquette: Still Life as Constructed Landscape". Here we trace the lineage of the object we call still life. Like the histories of landscapes, portraits and other genres, the history of the still life goes back to the very beginnings of photography. To properly position its significance we must note, too, that in the West the still life became differentiated as a independent genre of painting in the 16th and 17th century. Core motifs in classic examples of the genre included books, vessels, musical instruments, together with the furniture, tools and materials found in the painter's atelier. Fruits, cut flowers and game are other familiar examples.

These classic motifs in Western painting can also be found scattered here and there in photographic still lifes. By placing material objects in relation to each other, photog-

raphers, like painters, have found it relatively simple to construct expressive spaces that convey their creative concepts. The images they create by assembling and arranging material objects on pedestals are, in effect, idealized landscapes.

Surrealist still lifes attempted to open the way for new forms of expression in a genre dominated by realism and mimesis. To achieve this aim, surrealists used an experimental technique called dépaysment, juxtaposing objects of radically different character. By adopting a perspective that focuses on accidental and unexpected relationships between objects and juxtaposing radically different materials, they inverted the predictable functional relationships of object and expressed new aesthetic attitudes and insights by emphasizing the unique presence

and sheer existence of material things.

In the early 20th century, when modern photography was taking shape, the typical photographer's attitude toward material objects was highly realistic. The surrealists' new approach, focusing on the objects themselves and drawing attention to design and construction through values added by radically different perspectives, was literally a fresh angle and was quickly adopted in advertising. It reflects the broad and expansive spirit of an age in which landscapes, too, were being reconstructed.

"Corridor of the Gaze" is the overall title for exhibitions held throughout this year. Chapter 3 will focus on landscape, Chapter 4 on portraits. All these exhibitions are focused primarily on photographs in the museum's own collection, allowing the visitors who wander through our gallery to weave together the elements and perspectives that these various genres represent.

Lonely Maguette - The Surrealist Objet

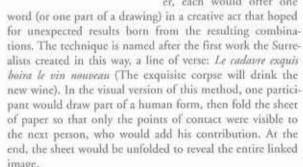
Kyoko Jimbo

The Surrealists' interest in physical objects and images created by assembling and organizing materials was the polar opposite of what earlier generations of artists had been trying to achieve with the traditional still life. The still-life style established in Europe in the sixteenth and seventeenth centuries attempted to present an orderly world view through combining objects of allegorical significance. By contrast, Surrealist artists working in its "objet" style, which flourished in the 1930s, focused on arousing a new awareness of the object itself, thoroughly confounding expectations about the functions of the object.

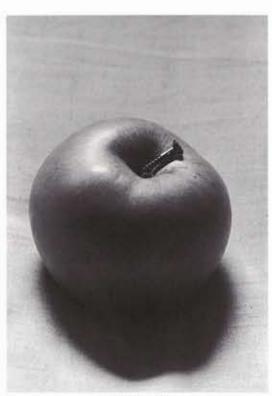
Surrealism, in which the object played a highly significant role, was itself informed by Freudian psychoanalytic theory and formally launched with the 1924 Surrealist Manifesto issued by the poet André Breton. Surrealism reached

its apogee in the latter half of the 1930s, then carried on, largely under Breton's leadership, despite the obstacles presented by World War II before gradually coming to its end. This essay addresses the objet in Surrealism and Surrealist objet photography largely through the Surrealist artist and photographer Man Ray, who not only created a large number of objets but also provided a lasting record of them through his photo-

"Exquisite Corpse," while often described as a parlor game, was one the techniques Surrealists used to create a single image through the joint labors of several people. Surrealism produced both linguistic and visual experiments in the Exquisite Corpse mode: the participants would not reveal their thinking; rather, each would offer one



Methods such as that were linked to the dépaysment, uprootedness and psychic automatism, that Surrealism aimed for. Breton stated that the intention was to transmute "those two seemingly contradictory states, dream and reality, into a sort of absolute reality, of surreality..." 1 Assemblages and programs that had an element of the unexpected were pursued through words as well; they were devices that led to "convulsive beauty," unfathomable beauty overflowing with strong feelings, filled with the power to



短期 Unsided/1921 (printed lazer)/Gelasin allver print

並列や邂逅が演出された。例えば、ロートレアモンによる詩の一 のなかでも作家は、「絵画は旧式な表現方法であり、人々が視覚 節に触発されて創られたマン・レイのオブジェ、「解剖台の上のミ 的に教育されれば、絵画は写真に王座を明け渡すことになるだ シンと蝙蝠傘の偶然の出会いのように美しい」は、ミシンと蝙蝠傘 という、ともに日常的な道具でありながら、その機能的役割におい ては決して同時に使われるはずのない2つの物体を並置させて いる。そして解剖台という非日常的な空間で、日常的な物質同士 が出会うというポエジーは、このようなデベイズマンによる側発性 をわらったものである。

たカタログとして出版されているが、「オブジェ」の項によれば、マ ルセル・デュシャンによって1913年(原文では1914年)に制作され たレディ・メイドのオブジェをシュルレアリスムの最初のオブジェとし て規定している。例えば男性用便器という既製品(レディ・メイド)

質自体に対する認識の転用 を図ろうとしてセンセーショナ ルな出現をなしたデュシャンの 作品は、シェルレアリストたちに 多くの示唆を与えた。シュルレ アリスムにおけるオブジェ制作 はこのような20世紀初頭の美 術史における革命的な意識の 変革につらなる行為であった。

マン・レイによる初期のオブ ジェ [贈り物 [(0)は [シュルレア リスム宣言 | の3年前, 1921年 に制作されている。本作品は 一般に、グダ的オブジェとして 位置づけられているが、この作 品ではすでに、アイロンの底に 一列に釘を穿たれ、機能を喪 失した一個のオブジェそのもの が、デベイズマンを内包した物 質として成立している。この作 品は,同年7月の革命記念日に デュシャンの後を追うようにして ニューヨークからパリに移った マン・レイが、かの地で最初に 開いた展覧会のオープニング

投合し、共に飲み交わした何杯かのアルコールの後にこの著名 な作曲家を通訳として金物屋に立ち寄って材料を入手し、すぐに 出品作品として加えられたというエピソードが秘められている。

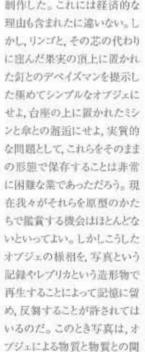
マン・レイのオブジェに対する姿勢は、デュシャンのそれとは異 なるものだった。デェシャンにとっては、オブジェには「非審美的な」 視線を向けるだけで充分であったが、マン・レイにとっては少なくと 6二つの要素が必要だった。作家は自叙伝のなかで、「私にはす くなくとも二つの要素が必要で、ひとつだけではだめだ。なんの関 係もない二つの要素が必要なのである。私にとって創造的な活 動とは、二つの異なる要素をつないで造形的な詩をつくることだ」と 配している。2

画家として出発したマン・レイは、写真によって自らの絵画作品 を記録として撮影するうちに、次第にこの黒白の階調のうちに写 し出される再生のイメージに価値を見いだすようになった。自伝 ルル・ラットン画廊で開催された「シュルレアリスムのオブジェ」展で

ろう。」と記している。こ しかし、このようにしてその有用性を評価 しながらも、一方で彼は写真の芸術性を否定し続けた。この姿 勢は、資料を解説する副産物として写真を位置づけているという 印象のあるシュルレアリストたちに共通する見方でもある。例えば 機関誌に掲載されている写真は、極めて匿名性の高いものであ る。「シュルレアリスム革命」誌は、科学誌「ラ・ナチュール」をモデ 『シュルレアリスム簡略辞典』は1938年の『シェルレアリスム国際 ルとして刊行されたものであるとされているが、ここに掲載されて 展」の際、アンドレ・ブルトンとボール・エリュアールによって編纂され いる図版もまた、科学誌の図解をみるように、ストイックな様相を呈 しているのである。

マン・レイの創作の姿勢には、しばしば反復の行為が読み取れ る。彼はオブジェを制作すると、すぐにそれを写真として記録にと り、その後最初に制作されたオリジナルのオブジェのほとんどが、 を見立て直し、これに「泉」というタイトルを与えて作品とみなし、物 破壊され、紛失してしまっている。彼の生涯の間に再生され、作

> 家の許可のもとに制作された レブリカの「贈り物」は5000個 にも及び、この他にも度々絵画 の模写やオブジェのレブリカを 制作した。これには経済的な 係性をより明確に固定し、複製



当日に即興的に制作されたものである。具体的ないきさつは想像 し、量産し、そして再提示する手段となった。 写真はあくまでも記録 の域を出ないが、この日会場で偶然出会ったエリック・サティと意気 者として位置づけられ。しかもその忠実性によって、シュルレアリスム の神髄に触れるメディアとなり得たのではないだろうか。

マン・レイ Man Rey 世界の原準 Mille universelle/1930 (printed later)/Gelazin rilver print

ある領域において、シュルレアリストたちはかなり多岐にわたっ て、あらゆる表現を執拗にオブジェ化しようとした。また広義の捉 え方では、風景を形作るモティーフをも含めたあらゆる形態に対し て、オプジェとしての認識を促した。彼らはそれぞれの物質を一 湯独立した単一のオブジェのようにして切り離し、そしてこれを再 び結合、あるいは構成することによって、言語的に、もしくは視覚 的に、「痙攣的な美」を喚起するようなひとつのイマージュを提示 することを最終目的としたのである。

1930年代を通じて、シュルレアリスムのオブジェに対する関心 は極めて高まりをみせた。1925年に初めてのシェルレアリスム展 が開催されて以降、展覧会には数々のオブジェが出品されたが、 その内オブジェを最も大々的に扱ったのは、1936年にパリのシャ

ある。この展覧会には、かのメレット・オッペンハイムによる、内側に 情報として「確かにそこに存在していたもの」であることを証明す 毛皮のはえたティー・カップや、近年にわかに注目を浴びるようにな る、作品のオリジナリティとしての説得力を喪失してしまっている。 ったクロード・カーアンによる。構成力の感じられるオブジェ2点も出 品されている。1936年のこのオブジェ展は、他の作家たちの制作 意欲をも刺激し、この年をひとつの直点として、数多くのオブジェ が飼出されている。また同年、「カイエ・ダール」誌は「オブジェ特はないだろうか。 集」号を刊行した。

彼らの興味の対象が、およそ一時代の芸術潮流をかかえきれない ほど多岐にわたっていたように、シュルレアリスムのオブジェもまたあ らゆる領域にわたって注目を喚起させた。それはサルバール・ダリ による「象数的機能のオプジェ(objet a fonctionnement)」、マン・レイ による「数学的オブジェ(objet mathématique)」から、「発見されたオ プジェ(objet trouvé) | レディメイドのオプジェ(objet ready made)」な どを含む、極めて広義なものである。この他にもジャコメッティによる、いだろうか。これはマン・レイのオブジェの記録のみならず、シュル

男女の性愛を暗示させたエロ ティックな動くオブジェや、ジョル ジュ・ユニエによって制作され た本のオブジェ(libre-objet)。 ハンス・ベルメールによる。関節 が自由に動く人形のオブジェ またアンドレ・ブルトンによる物体 詩 (objet-poème)などなどであ る。つまりそれは、例えていえば 印象派絵画の絵筆による独特 の筆致や、ピクトリアリズムの写 真表現の、叙情性に満ちた霧 のかかったような軟焦点による 印画法といった。表現のテクス チュアや技法に収束できるよう な狭義な意味での表現領域 に収まりきらない多義性を抱え ていたのである。

彼らはまた物質の神秘的。 あるいは有機的(バイオモルフ イック)な影態に興味を示した。 「シュルレアリスム革命」「ミノ トール」などの機関誌を中心 に、そうした図像を写真によっ て提示することによって、無機

せた。またオセアニアなどにみられる民族的な彫像や仮面のエ ブジェのコレクションが所狭しと飾られていたという。

グルのヴァイオリン」。印刷用プレス機の傍らで身体にインクを徐ら の深淵を司る。限りない風景の一端を担っていたのである。 れたメレット・オッペンハイムなどがあげられよう。

マン・レイは、作品そのもののオリジナリティに関しては関軟しな いタイプの作家であった。それぞれのオブジェがもつ、再生された 物質としてのイマージュは、薄っぺらなテクスチュアのもとに、アイ ディアを解説する模型(マケット)として、「そこに今、存在するもの」 としての存在意義は果たし得ても、創造のオリジナリティを伝える

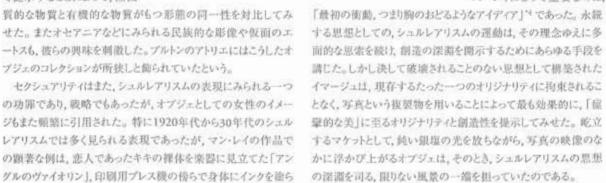
これに対して写真という媒体は、シュルレアリストたちにとって、表 現のテクスチュアを超越した, 純粋なメッセージとしての批判精 神を正しく伝える表現方法として奉仕することを可能にしたので

マン・レイは表現のテクスチュアに拘泥することなく、またその表 『シュルレアリスム革命』を始めとする出版物などから読み取れる 現の枠組みに規定されることなく前進した。写真は時間軸を変換 させ、三次元から二次元へと視覚的変容を果たすことによって、オ ブジェとの一定の距離を保ちうる。しかし同時に, 写真は実在か らは遠ざかりつつも、極めてリアリティに近接した媒体として資料 を提供した。そしてこの現実に則したリアリティを主張した写真と いうメディアは、副産物として奉仕したからこそ、シュルレアリスムの 活動においても本質的役割を果たすメディアと成り得たのではな

> レアリスムの主要な刊行物や 機関誌のなかで位置づけられ る写真一般の位相に共通して 言い得る命題であろう。

リー・ミラーの瞳をメトロノー ムの針の先にとりつけたマン・ レイの作品「破壊されるべきオ ブジェ」は、展覧会を訪れた観 衆の一人によって実際に破壊 され、その後「破壊されないオ ブジェ」というタイトルで再制作 され、そして最後に「水続する モティーフ」となった。この一連 の再生と改題の行為は、諧謔 とアイロニーに満ちた作家の修 辞学であると同時に,作品に対 する祈りにも似た, 一つの象徴 性を物語っているようにも感じ られるのだ。

シュルレアリストたちの興味 の対象にあった6のの本質は、 「痙攣的な美」を喚起するなに か, それを喚起するための着 想であり、また「視点」であった。 マン・レイにとって重要なのは、





【じんぼ・きょうこ 東京都写真美術館学芸員】

- *) アンドレーブルトン著「過底器」, 1932年所収。
- *2 「マン・レイ」 ニール・ボールドウィン著、鈴木主模訳、草思社、1993、p142。
- "3- Man Hay, Self Phermit, Little, Brown and Company, Boston, Trento, 1963.
- *4 ibid.

astonish and brimming with originality.

The objets that played such a central role in Surrealism were, with few exceptions, isolated models (maquettes) enveloped in depayment. The Surrealists also produced assemblages and chance encounters of objects of diverse functions and natures. Man Ray's objet entitled Bean comme la rencontre fortuite, sur une table de dissection, d'une machine à coudre et d'un parapluie (As beautiful as the chance meeting on a dissecting table of a sewing machine and an umbrella) is a good example. Inspired by a line in a poem by Lautréamont, it brought together two everyday tools, a sewing machine and an umbrella, which would, in terms of their functions, never be used at the same time. Where they come together is defined as a dissecting table, a very extraordinary space indeed. The poesy of an encounter between two commonplace objects thus aims at an accidental quality arising from dépaysment.

André Breton and Paul Eluard published Dictionnaire

Abrégé du Surréalisme (An abridged dictionary of Surrealism) as their edition of the catalogue of the international Surrealist exhibition of 1938. According to its entry under "objet," the first Surrealist objets were the found objects Marcel Duchamp created in 1913 (1914, according to Breton and Eluard). For example, Duchamp reassessed a urinal as found object (or "readymade," to use his term), gave it the title Fountain, and exhibited it as a work of art. Duchamp's work, which attempted a transformation of awareness of objects themselves, created a sensation and became a fertile source of ideas for the Surrealists. Indeed, the creation of objets in Surrealism was related to the revolutionary transformation of consciousness in the early twentieth century history of art.

The earliest objet Man

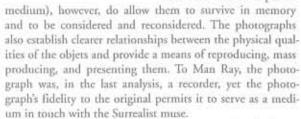
Ray created, his Cadeau (Gift), dates from 1921, three years before Breton's Surrealist manifesto. While usually regarded as an example of Dada, in this work-an iron with its foot studded with nails-practical function is lost and the objet itself is enveloped in the dépaysment characteristic of Surrealism. Man Ray, who had moved from New York to Paris after Duchamp moved back there, improvised Cadeau on the opening day of the first exhibition held in Paris after his arrival, on Bastille Day. The story is that Man Ray happened to meet the composer Eric Satie that day and found him a kindred spirit. After several drinks together, Man Ray, with the famous composer as his interpreter, went to an ironmonger's, acquired his iron and nails, and quickly had a work that was immediately accepted in the show.

Man Ray and Duchamp differed in their attitudes towards the objet. Duchamp found it sufficient for it to direct an unguarded, aesthetic gaze to the object. To Man Ray, at least two elements were necessary. In his autobiography, he asserted, "I never do just one thing, but two things that are totally unrelated. I put these together in order to create, by contrast, a kind of plastic poetry."12

Man Ray, who started his career as a painter, began using photography to record his own paintings and in the process discovered the value of the reproduced images he was photographing, with their shades of black and white. In his autobiography, the artist said he believed that "painting is an obsolete form of expression and that photography will dethrone it when the public is visually educated."3 But while he respected the utility of photography, he continued to deny that it was an art form-a view he shared with other Surrealists, who give the impression that they positioned photography as a secondary product, explanatory material. The photographs published in the movement's journal are an authoritative example of the Surrealist view of photography. Just as La Révolution Surréaliste was modeled on the scientific journal La Nature, the plates in it have the stoic quality of scientific illustrations.

Man Ray's creative work included certain repetitive

behaviors. When he created an objet, he would immediately record it in a photograph; almost all the original objets were later lost or destroyed. Nonetheless, in his lifetime, 5,000 replicas of Cadeau were produced with the artist's permission, and he often replicated his paintings or other objets as well. Undoubtedly economic reasons did play a part in his authorizing replicas, but the sheer difficulty of preserving his work also presented a daunting practical problem-whether it was an extremely simple objet such as a cored apple with a nail set on top of it to replace the core, indicating depaysment, or the sewing machine, umbrella, and dissecting table assemblage. Almost none of those works survive in their original form. The photographic record as well as replicas (which reproduce his work in a plastic



フレアリック・ブマー Frederick Sommer アダムの旅行戦 Value d'Adam/1949/Gelatin silver print

In some fields the Surrealists were quite obstinate about turning all sorts of styles of communication into objets-and the diversity of their work was immense. In a broad sense, they promoted recognizing many forms, including the motifs that make up a landscape, as objects. They dissected physical objects into radically independent objets and then recombined them or made compositions of them, to present a single image that could arouse, verbally or visually, a "convulsive beauty." That convulsive beauty was their ultimate goal.

During the 1930s, Surrealism's interest in the objet heightened remarkably. Objets had figured at Surrealist exhibitions since the first one in 1925, with their presence peaking at L'Objet Surrèaliste, a 1936 exhibition held at the Charles Ratton Gallery in Paris. It was there that Meret Oppenheim's famous object (Fur-Lined Cup and Saucer) was shown, as well as two works that demonstrate Claude Cahun's abilities in composition, (Cahun has been much admired in recent years.) The objet exhibition in 1936 stimulated other artists to create objets, for which output surged that year, and Cahiers d'Art ran a special issue on

La Révolution Surréaliste and other publications reveal that these artists' interests were too broad-ranging to be tidily subsumed under one period's art trends, and that is true of Surrealist objers as well: they aroused interest in a wide range of fields. We have Salvador Dali's objet à fonctionnement, Man Ray's objet mathématique, the objet trouvé (found object) and the objet ready-made. The moveable erotic objet that suggests sexual intercourse by the sculptor Alberto Gia-

cometti, the book as objet (libre-objet) as created by Georges Hugnet, the objet as human figure, with freely moving joints, by Hans Bellmer, and the objet-poème by André Breton are other examples. That is, the Surrealist use of the objet was multivocal and less bounded by a particular expressive domain. in the narrow sense, compared with the characteristic brushwork of the Impressionists or the lyrical, misty, softfocus printing techniques of the Pictorialists.

The Surrealists were also interested in the mystical or biomorphic forms of physical substances. La Révolution Surréaliste, Minotaure, and other journals of the Surrealist movement presented photographs of such images and compared the identify of form that organic and inorganic substances have, Photographs of the ethos of masks and

folk sculpture, such as found in Oceania, also stimulated their interest. Breton's atelier was packed with his collection of such objets.

Sexuality was another aspect of the Surrealist style-a strategic move and one not without guilt. Images of women were often quoted in objets, particularly in the Surrealism of the 1920s and 1930s. A striking example in work by Man Ray was his Le Violon d'Ingres, in which he adorned the nude back of his lover Kiki with the curved "f" frets of a violin, or the work in which Merer Oppenheim smeared himself with ink beside a printing press.

Man Ray is, in the variety and originality of his work, an artist who cannot be readily assigned to a fixed category. Images of his objects as recreated materials would seem to have a raison d'etre: they are maquettes produced with meager technique to explain his ideas. But the photographs lack the persuasive force of original work that attests "there is really something there"-information communicating creative originality. Still, to the Surrealists, photography transcended stylistic texture to win respect as a medium that

could accurately communicate the critical spirit as pure mes-

Man Ray, no stickler for texture, moved ahead without nailing down defining frameworks for his work. His photographs transform the time dimension, carry out the visual transformation from three to two dimensions, and in the process maintain a set distance from the objet. But while the photograph is removed from the real, it provides reference material; it is a medium permitting one to come extremely close to reality. Surrealist's respect for photography-as a secondary product, as a medium that puts a reality modeled on reality before one-was why it was a medium with an essential role in Surrealism. That communicative mission is shared not only by Man Ray's recordings of his objets but also by the photographs in major Surrealist

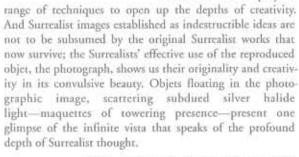
Man Ray's Objet to Be Destroyed, which showed Lee Miller's eye affixed on the tip of a metronome's rod, was actually destroyed by one of

the visitors to the exhibition. Afterwards he reproduced the work under the title Objet Indestructible, and later as Perpetual Motif. His repeatedly reproducing and

improving this work was part of his rhetoric as an artist, filled as it was with humor and irony, but it also gives one a sense of his engaging in a discourse about symbolic qualities related to his attitudes towards his work.

What the Surrealists were interested in-the essential nature of an object-was a concept to stir up whatever it would take to arouse convulsive beauty. Man Ray's, interest in the object, as such, was also a way of looking. What mattered for him was the first impulse, the idea that made the heart leap. As an ongoing body of thought, Surrealism continued to explore its characteristically diverse ideas and to employ a





[Curator, Toleyo Merropoliran Museum of Photography]



^{*1-}André Breton, Les Vises Communicants, Cahiers Libres, Paris, 1932-



水田一覧 Ishu Negara te unknown/c.1937/Gelatin silver print

^{*2-}Man Ray, Self Pornait, Little, Brown and Company, Boston, Tronto, 1963.







視線の回廊 THE LONELY MAQUETTE Still Life Arrangement as Constructed Landscape 1998年7月3日[金]—9月27日[日] July 3 fri—September 27 sun. 1998

主催東京都写真美術館 Tokyo Metropilitan Museum of Photography







Flowers

アラワーズ 花は、等物側に割ける優もポジェラーかつ普遍的な モナィーアのひとつである。自然が何む物格的なその影像や色彩は、確定たちの報意力を軽離して止 まない、同様は、静意素の伝統を指導した子高な たちにとっても、花は魅力的な存在をあ続けてい る。大型から人為的に質り取られ続に急げられた 花は、「形せる自然(manr count)」へと維格を改め、 写真家独自の支持数を担うこのできる多面性をも った素材へと変容を達する。































Still Life Arrangement 静物等後の模型
申記信在中を基本を一か用に寄せ集め、それら
性偏血することによって一つの対象物として初空間 きかたちづり、これを始重の主題として指くように
なった「静物質」が誕生したのは、他紀だかけで指 他にかけてのは一つからおいてだった。選手はた 物質のもつ象徴性によって「静物」は、関軍たちの 思想や組造性を叩喩的に提ぶした。こうした必須 の伝達は、耳其能力もによっても思想に知識され でいた。





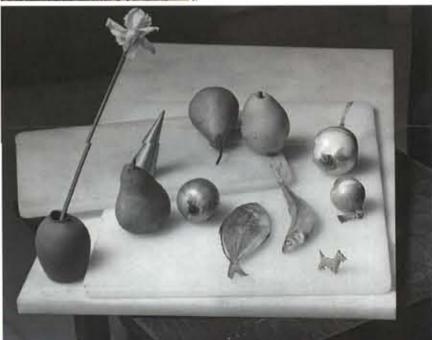














Constructed Landscape 構築された風景 キアジルに対じられた風景は、物質そのものへの調 味をからたてると同時に、複数のオアジルを一か所 に寄せ集めることによって独特の京園構成を改立 かせる。ジャングルーヴァーや10世紀子もによって、 の景色に収みられたつ人とオナジルの構成は、19 世紀のテルボットペルヤールをはよる静物写真に相 満する機器を感じませる。それらは時代を超えて、 介面の思想や表現を反正する。表れらは時代を超えて、 介面の思想や表現を反正する素材としての「静物 の世界」を側出させている。



